



## 待降節第 1 主日 (マタイ 24:37-44)

すぐに「またあなたとともに」と言える準備を

いよいよ、「新しいミサの式次第と奉献文」を使ってのミサが始まりました。福音朗読に「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである」(24・44)とありますが、「ミサ式文の変更」という、「思いがけない出来事」で私たちは試されています。

用意しましょうと呼びかけたのに用意しなかった人は、「そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される」(22・40-41)このように置いて行かれることとなります。思いがけない出来事でしたが、今からでも私たちは、救い主の到来の準備に充てることができます。大人なので事情を理解できます。幸いなことです。

金曜日の中学生のけいこで、ミサ式次第の最終確認をしたあとに、「明日から、これまでのミサ式次第とはお別れです。さようなら」とおおげさに伝えますと、中学1年生の女子三人組はあっけらかんとしていて、「さようなら～」と手を振ってくれました。

大人の人、特に後期高齢者の皆さんは「人生の最終盤でなぜあらためてミサ式次第を覚えなければならないのか」という思いでしょう。ただ、中学1年生を思うと、ようやく12年生き始めたばかり。ミサの式次第も保育園で覚えたとすれば5年6年お世話になったに過ぎません。ですから未練も何もないのだなと思いました。この子供たちがこれから60年70年使用していくための典刷新です。どうか、ご理解ください。

実は今回のミサ式次第と奉献文の変更は、主日のミサに限ったことではありません。生活全般に関わる変更になると言って良いでしょう。食べたり飲んだり、めとったり嫁いだり、人を送り出したり、こうした日常の出来事すべてに、ミサの式次第と奉献文の変更は関係しています。今日以降に結婚式、通夜、葬儀、納骨、その他何かしらの祝福を行うなら、どの儀式であっても、新しいミサ式次第の少なくとも一部分は関わってくるからです。

「主はみなさんとともに」という司式者の招きは、主日のミサ・週日のミサに限ったことではありません。あらゆる儀式を結ぶときに、司祭のこの招きが使われています。さらに困難なことに、今この場でおささげしているミサはかろうじていろいろな年代の方が参列していますが、保育園児だけ、高齢者だけの場所でミサをすることもあります。

つまり、あらゆる人が「目を覚まして」「用意していなさい」と言っているのです。思いがけない今回の変更は、呼びかけにどれくらい応えてくれたかを確かめようと主がおいでになる格好の機会です。今からでも遅くはありません。用意して、生活の中に、心の中に、主をお迎えすることにいたしましょう。